Osaka University Knowledge Archive

Title	日本語と中国語の複文 ： 並列、累加関係とその周辺
Author(s)	謝, 福台
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54303
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【21】

氏　　名	謝（シャ）　福（フク）　台（タイ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２４０５８　号
学位授与年月日	平成22年３月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	**日本語と中国語の複文－並列、累加関係とその周辺－**
論文審査委員	（主査） 教　授　仁田　義雄 （副査） 教　授　小矢野哲夫　　教　授　三原　健一　　教　授　杉村　博文 准教授　堀川　智也

論　文　内　容　の　要　旨

日本語と中国語を対象にする本研究は、並列、累加関係を通して、両言語における現象を具体例を挙げながら個別に記述・分析し、そこから異同を見出すことを目的とする。

記述・分析にあたり、その基準として、等質性・異質性と形式による意味付加を導入した。この二つの観点は、本研究の中心的な軸である。

並列表現における前件と後件は、等質性または異質性を持つ。この等質性と異質性は心的枠によるものであり、接続形式と深く結びつき、等質性を表す形式と異質性を表す形式に分かれる。

例（１）、（２）は、評価を帯びる形容詞による並列表現の例である。

（１）この店は安くておいしい。
（２）この店は高いがおいしい。

例（１）では、接続形式がテで、テによって接続する前件「安い」はプラス評価を帯び、後件「おいしい」もプラス評価を帯びる。例（２）では、ガによって接続する前件「高い」はマイナス評価を帯び、後件「おいしい」はプラス評価を帯びる。つまり、テの前件と後件は同じプラス評価を帯びることで等質性を持ち、等質的並列関係をなし、ガの前件と後件は異なる評価を帯びることで異質性を持ち、異質的並列関係をなす。テは等質性を表し、ガは異質性を表す。

例（３）は非文とされた例である。

（３）*この店は古くておいしい。（寺村1991より。下線は謝）

例（３）が非文とされた原因は、等質性と異質性の観点から明らかである。テの前件「古い」が帯びるマイナス評価と、後件「おいしい」が帯びるプラス評価による異質性が、テが表す等質性と衝突したことで、非文となるのである。例（１）～（３）は、等質性・異質性と接続形式が強く結びついていることを示している。

例（１）～（３）のような、取り立て助詞が前件と後件に入り込まない並列表現に対し、例（４）のような、取り立て助詞モやハが前件と後件に入り込む例もある。

例（４）では、同じ「できる」を有するシの前件と後件は、等質的並列関係をなす。その上に「～モ～、～モ～」構造による「同類共存」という意味合いが付加され、同類共存的かつ等質的並列関係をなすことになる。このような現象を、形式による意味付加と呼ぶ。

本研究の構成は次の通りである。序章では、先行研究の文、命題、モダリティ、主語などの定義を踏まえて、本研究の基本的立場を示した。命題の構成成分を「主語・述語句」とし、「主語は主体を指し、述語句は主体の特徴を指す」とする。「主・述」構造をなす「英語が上手である」のような、さらなる主体が要求される命題を「不完全命題」と呼ぶ。

第一章では、並列に関する先行研究をまとめ、並列関係を定義した。並列表現を含む文構造は、枝分かれ文とあわせ文があり、また、並列表現からなる連体修飾節は主体の特徴を表し、主名詞は主体を表し、枝分かれ文と同質である。異質的並列では、話者が、並列関係にある二つの表現のいずれに重点を置くかによって、前件と後件の順序が決定され、その点において、等質性を持つ並列表現とは異なる。

第二章では、形容詞が中心となる並列表現を、評価性によるものと、反義関係にある語ペアによるものと、前件と後件が同じように知覚的に捉えられる特徴によるものに分け、記述し分析した。

プラス評価またはマイナス評価を帯びる属性を評価性と呼び、評価を内的評価と外的評価に分けた。複数の形容詞が接続する表現、述定表現にも装定表現にも、評価性によって意味的等質性を持つ並列関係と、意味的に異質性を持つ並列関係をなすものがある。「連用形、テ、シ」による等質的並列表現の前件と後件が自由に入れ替えられ、前件と後件が意味の上で同じ重みを持つのに対し、「ガ、ケド」による異質的並列表現の後件は、意味の上で、前件より重みを持つ。この重みは文脈によって付与されるのである。また、シによる形容詞の並列には装定表現がない。反義関係にある語ペアによる並列表現には、等質性を持つ「ＡくてＢい（遠くて近い）」などの構造を有するものと、異質性を持つ「Ａいガ/ケド、Ｂい（遠いが、近い）」などの構造を有するものがある。「ＡくてＢい」の後件は文脈上前件より重みを持つ例が多く、テは等質性を表すのであるが、異質性を表すガ、ケドの意味・機能に近づいている。知覚的に捉えられる特徴による並列関係には、異質的なものは少ない。

第三章では、接続形式が取り立て助詞と共起しない並列表現を考察した。その前件と後件は、統括部（題目など）の現象描写的な状態と属性・性質、または統括部の例示・補足説明やそれについての判断、あるいは、統括部の根拠・原因・理由などを表す。現象描写文や現象描写文的な表現における並列表現は、連用形、テによって接続される傾向があり、シ、バ、ガ、ケドによって接続されない。シを含む表現は、先行文や先行する文脈の根拠・原因・理由を表す傾向がある。

第四章では、接続形式が取り立て助詞と共起する構造を持つ例を記述し、分析した。取り立て助詞による「～モ～接続形式、～モ～」構造は、同類共存的かつ等質的並列関係、あるいは同類共存的かつ異質的並列関係を表し、「～ハ～接続形式、～ハ～」構造は、対比的かつ等質的並列関係、あるいは対比的かつ異質的並列関係を表す。

第五章では、中国語学で定着した累加という複文のカテゴリーに相当する日本語の表現を体系的に捉えることを試みた。その上でそれらの日本語表現を網羅的に記述し、以下の三つのグループに分けた。

a. 前件と後件に異なる取立て助詞が入り込む「～∅～、～モ～」構造と「～ハ～、～モ～」構造による累加表現。
b. 「～接続形式、～」構造に入り込む接続詞（マタ、カツ、ソシテ、ソレニ、シカモなど）による累加表現。
c. その他の形式（ウエ/ウエニ、ダケデナク、バカリカ、ホカ/ホカニ、オマケニ、ソレニクワエテなど）による累加関係または累加表現。

累加関係と絡み合うことのある展開関係は後件が前件に依存することによるもので、前件と後件は「指示」、「代用」、「省略」などの結束性を持つものが多い。

第六章では、シのいわゆる原因・理由の意味・機能について考察した。並列関係をなす全てのシの前件と後件が、ひとまとまりで文の成分として働く機能を、ひとまとまり性と呼ぶ。文の中で最も後部に位置するシの前件と後件が並列関係をなす場合は、閉鎖的ひとまとまり性を持ち、そうでない場合は、開放的ひとまとまり性を持ち、言語に明示されない節の存在によって「例示」というニュアン

スを帯びる。終止節に当たる、前件と並列関係をなすシの後件が欠けると、後続する文がその節の欠けた位置に埋まることも可能であるから、「並列」から、いわゆる「例示型」の原因・理由・根拠という意味・機能が派生したのである。この現象を「節の欠落」と呼ぶ。

第七章では中国語の複文における並列、累加表現を考察した。

中国語の並列表現は、形式によらないものと形式によるものがある。形式によるものは、“既……Y……”（Yは“又”、“也”など）と“X……X……（X……）”（Xは“又”、“一边”など）構造をなすのが主である。

累加表現については、その形式や構造を、次の三つのグループに分類した。

①接続副詞（“又”、“也”、“还”など）
②接続詞（“且”、“并”、“而”、“并且”、“而且”、“加上”など）
③複合構造（“除了……之外……”類構造、“不但……而且……”類構造など）

①と②の形式が共起する例が多く、その場合は、②は①の前に置かれ、累加関係が強化される。並列・累加表現における前件と後件は等質性を持つ。

中国語の異質的並列関係は、主として、後件に入り込む“却”、“但/但是”などの形式、あるいは“虽/虽然……但/但是/却……”構造が表す。

中国語の並列・累加表現も、日本語と同様に前件と後件が等質性あるいは異質性を持ち、また、形式による意味付加という現象も見られる。

第八章では、現代中国語における“又”の接続機能について通時的な考察を行った。“又”という文字の成立は、右手を象る甲骨文字「𠂇」に始まり、それは動詞「ある」の意味を持つ。“又”の接続機能の派生や“有”、“右”などの文字の派生は、「𠂇」の「制御域の拡張」という「基本義」に基づいている。その接続機能は、数字や数量詞の接続から、形容詞などの用言、句、節などの接続にまで発展した。副詞としての“又”は、「基本義」に基づき、接続機能を持ちながら、「再発」や「否定を強める」などの意味・用法を有するようになった。「再発」というテキスト的接続機能を有する意味・用法は、前件が文として独立したことから派生し、「否定を強める」という意味・用法は、前件が欠落したという「節の欠落」から派生した。

第九章では、日本語の「ではあるまいし」と中国語の“又不是”の対照研究を行った。この二形式は共に並列・累加を表す接続形式シまたは“又”を含み、また、同じく否定形式を有する。対訳を視野に入れての対照的な観点から、この両形式は意味・機能的に近接し、共に非事実命題の否定を担うことが明らかである。“又不是”を含む“是……，又不是……”構造は、“A1又A2”構造と分析でき、“又”の接続機能が強く働いていると考えられる。“又不是”は第八章で述べたように、「前件の欠落」という言語現象に関わり、それに対し、「ではあるまいし」を含む「～ではあるまいし、～だ」という例は少なく、「ではあるまいし」を一つの形式と見ることに関しては支障がないであろう。

『中日対訳コーパス』及び他の文献での対訳例から、「ではあるまいし」の意味・機能は“又不是”の意味・機能に大半は包摂されていると言えよう。

終章では、本研究の成果と今後の課題について述べた。

論文審査の結果の要旨

『日本語と中国語の複文―並列，累加関係とその周辺―』と題された本博士論文は，複文の中で，二つの節が並列や累加関係にあるものを，日本語を中心に分析・記述していき，それに相当する中国語の表現をも考察の対象にしたものである。二つの節の間に観察される，等質性・異質性という意味的関係のあり方を核に据え，並列・累加を表す複文の分析・記述を行っている。形式としては，等質性(いわゆる順接)を表す形式として，述語の連用形・テ形，接続助詞「シ」，およびいわゆる列挙を表す条件形(「～モスレバ，～モスル」)などを取り上げ，異質性(いわゆる逆接)を表す形式として，接続助詞の「ガ」「ケド」の類を取り上げ分析・記述を施している。

日本語の並列的な複文については，並列的な複文を作る，個々の接続形式についての意味・用法の研究はそれなりに行われてはいるものの，並列的な複文そのものについては，それが表す意味的関係が，順接的な関係にあるものと逆接的な関係にあるもの，といった比較的単純なこともあって，従来さほど体系的・組織的な考察は行われてこなかった。本論文は，そういった並列関係にある複文へのきめ細かく包括的な組織的研究である。まずこの点が，本論文の評価すべき第一の点である。

本論文は，並列関係を持った構造を，枝分かれ文，あわせ文，連体修飾節の並列表現などに分けながら丹念にきめ細かく分析・記述している。さらに，共起が不可能なタイプを含め，並列関係にある節が取り立て助詞を共起させる場合について，「モ」や「ハ」の共起によって，並列関係にどのような変化が起こるかをも考察している。たとえば，先行する節に他の取り立て助詞が存しないか「ハ」が現れ，後続する節に「モ」および累加の意味を持つ接続詞や表現が存在する場合を分析することで，単なる並列から，その意味に既に付け加わりの生じている，累加の関係へと，考察を拡大させている。また，「シ」の表す意味が基本的な並列から原因・理由に移行する機構を明らかにし，「シ」による原因・理由表示を指摘している。

さらに，並列的関係を周辺形式「する{ホカ／一方}，～」「すると同時ニ，～」「するトトモニ，～」「するニツレテ，～」「するダケデナク，～」「するノミナラズ，～」「する{バカリデナク／バカリカ}，～」などにも考察を及ぼしている。

また，考察範囲の拡大にも努めている。直接の考察対象は複文であるが，配慮すべき領域を文連続にまで広げている。それにより，外的評価により等質的な並列関係になりうる例を紹介している。たとえば，「*この店は古くておいしい。」のような，複文そのものだけでは逸脱性を示す文が，「この店は古くておいしい。何てたって明治時代から続いている老舗だからね。」のように適格性を有するようになる現象を指摘しえている。

分析・記述の確かさを保障し支える要因の一つに，いかほど実例を含む用例を丹念に見たかが挙げられる。本論文では，多様で多量な実例が採取され，丹念に利用され分析されている。そのことにより，本論文の分析・記述は，一定程度の確かさ・堅実獲得への条件を既に充たしたものになっている。この点も本論文の評価すべき点である。

本論文では，文法現象を単にきめ細かく分析・記述するだけでなく，分析・記述の立場を明確にしながら分析・記述を行っている。たとえば，心的枠，同類共存，統括成分，評価性(内的評価・外的評価)，等質性・異質性など，分析・記述の基本的な枠組みを，本論文の立場から明確に規定した上で提示し，多様で多量の実例に適用し，首尾一貫した分析・記述に努めている。分析・記述の枠組みと丹念な現象観察は，質の高い分析・記述の要件である。本論文のこのことを目指している。これも本論文の評価すべき点の一つである。

その結果，きめの細かい観察・従来言われていなかった指摘が見られる。たとえば，「遠くて近い国」「*遠く近い国」「*遠いし近い国」のように，反義関係にある形容詞はテ形では連結できるが，連用形や接続助詞「シ」では連結できないことの指摘がなされている。

ただ，中国語に関して本論文全体と有機的なつながりの薄い章の存在や，分析・記述の背景・姿勢を形成する概念に対して，少しばかり自己流の趣の強い解釈・規定が見られる。

しかしながら，上記のような問題点が存するにしても，本研究の目的は十分達せられており，今後に残された問題が存することは，研究の宿命であり，本論文の価値を損なうほどのものではない。

これらのことを総合的に判断し，本審査委員会は，本論文が博士（言語文化学）の学位を与えるにふさわしい論文であると判断した。